

## 手を携えて豊かな社会に

丸紅(株)

広報部長 中田 徹

丸紅のCSR活動の源流は、1949年に定められた社是である「正・新・和」にある。この精神に則った国際社会における企業市民としての責任を自覚した活動が、丸紅が目指す社会貢献の姿といえる。今回は、多岐にわたる取り組みの中でも、特に歴史と継続性をもつ国内外2つの活動を紹介したい。

### アジアでの奨学金制度

教育を資金面からバックアップすることは丸紅の社会貢献活動の柱の1つだ。丸紅は、現在東南アジアにおいて、フィリピン、ベトナム、インドネシア、カンボジア、ラオスの5カ国に教育基金を設立している。

#### 珍しい職業訓練生対象の奨学金

1989年、フィリピン市場における80年にわたる取引の中で深い事業基盤を築き上げられたことに対して感謝の意を表すため、当時の龍野社長がアキノ大統領(当時)を表敬訪問した。その席で、教育に熱心であった大統領に奨学金(Marubeni Scholarship Foundation Inc. 通称MSFI)の設立を表明した。



フィリピンでは  
職業訓練生が対象

フィリピンでは、たくさん子どもたちが学業を途中で諦めなければならない状況にあり、優秀な学生に勉強を続けるチャンスを与えることが、ゆくゆくは産業の振興、国の発

展につながっていくということが、アキノ大統領と龍野社長の一致した意見だった。

MSFIの特徴は、技術・農業系の職業訓練生を対象にしていることだ。特に貧困世帯出身者の学生を対象として、教育の中でも技術力を身につけることが、生活を安定させるのに役立つと考えたからである。通常、奨学金は大学生を対象としたものが大半である。職業訓練生を対象にした基金はあまりなく、特徴ある基金としてフィリピンでも高く評価されている。

#### 学生と先生の両方に奨学金

一方、ベトナムの奨学金基金(Marubeni Educational Foundation in Vietnam、通称MACFUND)は94年に始まった。ベトナムが国策として取り組む国民教育に役立ててもらうことを目的として、鳥海社長(当時)がベトナム出張時にキエツ首相(当時)に提案したものである。

ベトナム全土、特に貧しい地域や地方での基礎教育環境の拡充に資するため、対象者は小学生から高校生までと幅広く、優秀な学生に対する奨学金、苦学生への援助、自然災害による校舎修復・教材援助などに使われている。また、ベトナム独特の記念日である、先生を敬う「教家(先生)の日」には、先生にも奨学金を贈呈している。ベトナムが国として定めてい



先生への奨学金贈呈式(ベトナム)

る教師の評価基準をクリアした優秀な先生が各学校から推薦され、その中から MACFUND の対象となる先生を選んでいる。奨学金を受けた先生は、教育者としての啓発・鍛錬に奨学金を利用している。

99年には、設立50周年事業の1つとして、インドネシアの奨学基金 YAYASAN BEASISWA MARUBENI を設立した。さらに2007年度、創業150周年を記念し、カンボジアとラオスで新たに教育基金を設立した。それぞれ20万米ドルの拠出をおこなうと同時に、すでに設立して活動しているフィリピン・ベトナム・インドネシアの3つの基金についても、制度の拡充をおこなった。07年10月には、勝俣社長（当時・現会長）がカンボジアとラオスの関係先を訪問し、11月に両国における丸紅教育基金を正式に設立している。

今回の新規設立・拡充により、丸紅のアジアにおける海外奨学金に対する拠出額は、5カ国あわせて250万米ドルとなり、累計の支援対象者は4000人に達している。これらの奨学基金は、発展途上国の次世代を担う青少年の教育と育成に寄与し、ひいては、地域社会の文化、経済発展に貢献すると考えている。

## 丸紅基金

「企業の発展は社会の健全な進歩発展なくしてはありえない。企業の社会的貢献は、本来その経営行動を通じて実現されるべきである。自らの活動そのものを通して社会と直接かかわり、社会と手を携えて歩んでゆく」という経営方針のもと、1974年、社会福祉法人「丸紅基金」が厚生省の認可を受けてスタートした。75年に第1回の助成を実施、全国45団体に総額9782万円の寄付をおこなった。以降毎年総額1億円の助成を続け、2007年度までの33年間の累計助成額は33億円、件数は1842件に達している。

### “個人の善意”と“企業”の両輪

案件内容は、授産活動のための機器・備品の購入、施設の改修、高齢者、障害者の送迎・授産活



助成先の授産施設での製パン作業

動用車両の購入などを中心に、昨今の社会問題である薬物依存症への対応、児童虐待対応ネットの構築、ニート対応の労働体験施設の機器購入等々多岐にわたる。緊急性と重要性に加え、最近では、先駆的・開発的な視点に立って新しいことにチャレンジしているか、ということも選定基準として重視している。

助成先では、日々の活動に必要とされる車両の調達や施設・設備の拡充のための資金調達に苦勞しているケースが目立つ。類似の基金では助成対象から除外されることが多い福祉車両に対しても助成をおこなうといった、中小規模の施設・団体に配慮した助成対象の選定などにより、全国の福祉関係者から高い評価を受けている。

約24億円の資産から生じる運用益と並んで助成を支えているのが「100円クラブ」と呼ばれるユニークな取り組みだ。これは、丸紅の役員、社員、OBの有志が、1口100円で毎月決まった額を積み立てて丸紅基金に寄付をするもので、95年にスタートして以来、毎年1千万円程度が寄せられている。さらに、個人の寄付金やグループイベントの際の収益金、基金ボックスへの募金など、幅広い善意が、低金利の中でも毎年1億円の助成を続ける基金の活動をサポートしている。

こうした個人の善意と丸紅という企業による支援という「両輪」に支えられた社会福祉活動という点が丸紅基金のユニークさといえるかも知れない。

### ◆丸紅の社会貢献活動

<http://www.marubeni.co.jp/csr/social/index.html>